

〔講演録〕

講演会「金陽会の作家たち、その素顔」

太田 明（菊池恵楓園）

【開催日】2019年6月8日

【会場】国立ハンセン病資料館 映像ホール

【太田明さん プロフィール】

1943年11月、熊本市に生まれる。

8歳の時にハンセン病と診断され、国立療養所菊池恵楓園に入所。

1999年から2005年まで、同園入所者自治会会長。
現在、入所者自治会副会長ならびに一般社団法人金陽会理事。



木村 みなさんこんにちは。現在、企画展示室にて春季企画展「キャンパスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展」を開催中です。その関連イベントといたしまして、今日はいよいよ熊本の菊池恵楓園から、入所者自治会の副会長さんで、かつ金陽会の理事をされています太田明さんおたあきらをお招きして、講演会を開催します。企画展では10人の絵画作家の作品をご覧頂いていますが、今日は太田さんに、その10人の作家さんたちの思い出や、その背景にあるものを存分に語っていただきますのでどうぞご期待ください。それでは太田さんを拍手でお迎えください。（拍手）

◆菊池恵楓園の文化活動と絵画サークル「金陽会」のあゆみ

熊本から参りました、太田でございます。よろしくお願いたします。この席に座るのは3年前2016（平成28）年の12月でしたか、そのときのトークイベントが野球談義でございまして、「嗚呼、新良田教室野球部!!」以来でございまして、その節は、黒尾学芸部長さんに大変お世話になりました。今回は木村学芸員さんからのご要望で、再びこのお席に登板することになりましたのでよろしくお願いたします。

今日は野球の話ではなくて絵画の話をするわけですが、私自身子どもの時分から野球も好

きだし絵も好きだし、そういったことでこの二つは私の人生を豊かにしてくれた一つの大きな人生のツールだったかなという風に感じております。

今日の私の話は、まず菊池恵楓園における主な文化活動を通して、金陽会の歩みを紹介したいと思います。その次に金陽会を支えてくれた方々の紹介をしたいと思います。そしてメインテーマであります金陽会の仲間たちの紹介をさせていただき、これから金陽会作家たちへズームインをしたいと思っております。最後に金陽会の作品の評価を述べ、私の講演を締めたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

まずは恵楓園における主な文化活動と、金陽会の歩みについてお話をしたいと思います。戦前の療養所では俳句、それから短歌、そういった文化活動が盛んでございまして、恵楓園でも1913（大正2）年に「草の花俳句会」、それから1924（大正13）年には、檜ひの影かげ短歌会が結成されておまして、1926（大正15）年には文芸誌『檜の影』という雑誌が創刊されております。

当時の療養所では、病める者の生きる道は、宗教か文芸に進路を求める他に望みがなかったので、恵楓園においても、早くから文芸を奨励し患者の精神生活の向上発展に努めるという歴史がございます。特に1924（大正13）年に内田守人先生うちだもりとが医局に赴任されて以来、短歌を作る人が非常に

多くなってきました。当時の『檜の影』創刊号、現在の『菊池野』ですけれども、当時の『檜の影』創刊号には次のようなことが書かれています。

「芸術に国境がないように、私ども天刑病としても、…自分たちのことを天刑病と言っているんですね。…天刑病としても大自然に抱擁され、芸術に親しみゆくことを許されるに相違ありません。私どもは健康な人々の思い及ぼすことのできない苦しみ、悲しみを体験しております。その耐えがたい精神的苦痛と忍びがたい寂しさを、私どもは俳句や短歌によって自ら慰め、自ら楽しんでいくところであります。このやるせない現実の悲哀はただ、大自然の懷に抱かれ、芸術の殿堂にひれ伏すことによって融和されるのであります」。

1933（昭和8）年には島田尺草が歌集『一握の藁』を^{しまだしのぼう}発刊しています。これはおそらく全国の療養所で最初の歌集だったと記録されています。以来、アララギの会員が非常に増えていきました。

戦後まもなく、療養所もようやく民主主義と平和というものが訪れました。1946（昭和21）年には日本国憲法が公布され、特効薬プロミンの登場ということで入所者にとって、療養所にとって、大きな福音となったわけであります。

恵楓園では1946（昭和21）年に患者文化協会というものが発足いたしまして、翌年1947（昭和22）年には菊花展、あるいは運動会、花見踊り、盆踊りなどが催されております。1949（昭和24）年になりますと新劇研究会、あるいは文教管弦楽団も結成されております。オーケストラもありました。そして1953（昭和28）年になりますとこの絵画グループ金陽会が結成された訳であります。

その中で、彼らの文化活動をサポートしてくれる園内の職員の方が登場することになります。例えば文教管弦楽団を指導していただきました塚本^{つかもと}章先生、それから金陽会を指導していただきました渡辺^{わたなべしげまろ}茂磨、この方は精神病棟の看護長さんでした。それから原田^{はらださぶろう}三郎内科医師、そういった方々が入所者の文化活動を支援して下さることになりました。特に原田先生は1976（昭和51）年、閉校になりました恵楓園分校をアトリエとして利用しその後、県内各地で次々と金陽会の絵画展を企画・開催していただきました。

そういうことでずっときたわけですけれども、昭和40年代後半になりますと、園内にもいわゆる3Cブーム（カー、クーラー、カラーテレビ）というものが起きまして、軽症の方は外出労務をする方が増えていきます。園内の文化活動というものは一時期停滞期を迎えることになりまして、夏の納涼盆踊り大会も中断する、そういう時期もございました。1976（昭和51）年、自治会50年を迎えるわけですけれども、1976（昭和51）年発行の自治会50年誌を見ると、次のようなことが書いてあります。

「文芸にスポーツに、園創立以来、あるときは見る影もなく衰退し、あるときは目覚ましく発展を遂げ、この50年を過ごして参りました。しかしなんと云っても、我々の文化活動の最大の収穫は、自治会の創立と全患協の結成、この二つではないでしょうか」。

また昭和50年代に入りますと、園内ではゲートボール、それからカラオケが非常にブームになりました。当時の全患協支部長会議でも、会議の議案書は忘れてもカラオケのテープは忘れるなど、そういう有様でございました。

私は1985（昭和60）年に自治会の役員に就任して以来、まず最初に取り組んだのは、伝統的な恵楓音頭による盆踊り大会の復活でありました。それから菊花展、絵画展、写真展、生け花展を中心とした秋の文化祭の復活、それから全国友園カラオケ交歓会、あるいは全国友園囲碁大会、それから全国友園ゲートボール大会と次々に開催させていただきました。

このように入所者たちは長い療養生活の中でもそれぞれ精神的苦悩や肉体的苦痛、そして経済的な困窮を乗り越えて文化の花を咲かせてきたわけでありまして、療養所の文化活動は非常に多彩で豊かなものがございました。

平成に入りますと1994（平成6）年には文化会館を建設しまして、この中に金陽会のアトリエを設置しました。おそらく療養所の中にアトリエがあるのは恵楓園だけではないでしょうか。1998（平成10）年には熊本県立美術館において記念すべき第10回の金陽会絵画展を開催しております。そして2001（平成13）年には恵楓会館が落成いたしま

して秋の文化祭が非常に盛況になったということ
でございます。2002（平成14）年になりますと熊
本市現代美術館の南^{みなみ}郷^{しやう}宏^{ひろ}学^{がく}芸^{げい}課^か長^{ちやう}が恵^{けい}楓^{ふう}園^{えん}を初め
て訪問されまして、この金陽会の作品を見て、「こ
れぞ光の絵画だ」ということで、その芸術的な価
値を認めてくださいました。そして翌年2003（平
成15）年には熊本市現代美術館におきまして第1
回の金陽会光の絵画展を開催することに至ったわ
けであります。平成の時代になって金陽会の作品
というものは内外から高い評価を得るようになっ
たわけであります。

◆金陽会を支えた人びと

特に園内において絵画会のお世話をしてくれま
した2人の職員の存在というのは非常に大きかつ
たですね。

1人は看護長でありました渡辺茂磨先生、この
人は画歴も数十年と言うことで、伊藤画伯に師事
しデッサンや油彩を正式に勉強された方で、園内
で入所者に対してデッサンあるいは油絵の具の溶
き方を手ほどきいたしまして、絵心を育てた恩人
であります。

それから原田三郎先生。内科医長でした。園内
の分校の跡を先生方に交渉して教室の一部を借り
てデッサン教室を開設してくれましてアトリエを
設置いたしました。当時、立派な石膏像を囲みな
がら木炭画を数人の方たちが描きながら色々と熱
気のある絵画活動をされていました。

原田先生はいずれ、熊本市内で絵画展をやろう
ということで、早速1980（昭和55）年には金陽会
初の園外展、それを熊日画廊でやったんですね。
そういったことで入所者は療養所の中におりなが
ら、絵はすでに社会復帰を果たしたと、そういう
ことでございます。

◆入江章子さん

いよいよこれから今日の講演のメインになりま
す、金陽会の仲間たち10名についてご紹介したい
と思います⁽¹⁾。これから絵を紹介しながら、皆さ
ん方にご紹介したいと思います。

それではまず入江^{いりえ}章子^{あきこ}さんの作品を紹介したい
と思います。入江章子さんは1922（大正11）年、
三重県の上野市に生まれました。現在上野市は伊
賀市、伊賀の忍者で有名な、上野市の出身でござ
いまして、1940（昭和15）年に長島愛生園に入所
し、戦後、1949（昭和24）年に菊池恵楓園に転園
された方でございます。残念ながら2011（平成
23）年に89歳で逝去されました。

章子さんは県内でも実力派の歌人としても知ら
れておりまして、1987（昭和62）年には処女歌集
『青天』を、また1999（平成11）年には第2歌集『辰
砂の壺』も上梓されております。そして2003（平
成15）年には第31回熊本県芸術功労者というこ
とで表彰されています。多分これは日航ホテルだ
ったと思います。私も一緒に同行させていただきました。

彼女の作品というものは非常に女性らしい柔ら
かさ、それから調和を持った雰囲気のある作品が
多いわけですが、彼女の短歌の生涯の
テーマは「ハンセン病との戦い」、それから「法
律によるいわれなき偏見からの解放」、そうい
ったものを実現していくための日々であったと言
われておりまして、こういった、短歌に込める思
いというものが絵画の作品にどのように反映され
ているかは非常に興味のあるところだと思います。

入江さんのところにはたくさん学生さんが訪問
されておりました。この「婦人像」もそのうちの
お一人でございます。入江さんの絵のモチーフは
静物、それから人物画が多いんですけども、園
内風景もさりげなく描かれております。

今回展示されている「園内風景」。これは恵楓
園のシンボルともいえる大楠を背景に、福祉室周
辺を描いた作品でございまして、これは恵楓園の
昭和30年代の頃です。大楠は今でも空高く、緑豊
かに存在していますし、福祉センターは今もござ
います。他の建物は全て壊されておりまして、楠
の右側に自治会事務所が設置されております。実
はこの楠の木の下は野辺送りの場所でございます
で、彼女もこの楠の下で野辺送りされたわけでご
ざいます。

(1) ここで取り上げた絵画作品については、国立ハンセン病資料館2019年度春季企画展『キャンパスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展』の展
示図録を参照。

章子さんはご主人の入江信いりえしんさんと共に恵楓園の文化人の一人でございましたし、むしろ私は入江章子さんよりもご主人の入江信さんと交流が深く、実は私の前任のカメラ会の代表が入江信さんであり、自治会の渉外関係の役員も入江信さんで、私は入江信さんのお仕事、趣味も全部引き継いだということで現在に至っております。

◆大山清長さん

それから次に大山清長おおやまきよながさん。この方は1923（大正12）年、鹿児島県奄美大島の生まれで、残念ながら2015（平成27）年、92歳で逝去されております。残された作品は10点と、メンバーの中では最も少ない方なんですけれども、大山さんの代表作は、らい予防法が廃止された1996（平成8）年に描かれたこの「奄美の豚」ですね。これは金陽会の作品の中でも最も人気のある作品であります。

実は大山さんの園名は大川一おおかわはじめだったんですね。1996（平成8）年、らい予防法が廃止されたその年を機会に、園名の大川一から本名の大山清長にカミングアウトされました。その中で描かれたのがこの絵でありまして、多分この豚は前進する、前に進む、そういった大山さんのこれからの生き様を示す、そういった絵じゃないかなと思っています。

というのも奄美では古くから養豚が盛んでありまして、といってもこの白い豚というのは非常に珍しかったと言われております。ほとんど黒豚なんですね。でも大山さんの実家ではこの白い豚が飼われていたということです。ですから多分この白い豚と言うのは大山さん自身ではなかったのかなと思っています。この中央からやや前の方に、左側に寄っております。これから前に進むぞという、そういう意気込みですね。そういうことだと思っています。

昨年2018（平成30）年に奄美で金陽会の絵画展「ふるさと奄美に帰る展」を開催いたしました。最終日には大山さんの息子さんが姿を見せてくれました。実子の息子さん、この父親の絵をどのような思いで見たのだろうかと思っています。非常に色彩が豊かですね。「奄美風景」、これは現実の岬ですね。ふるさとを思いながら描いた作品が非常

に多いです。

◆奥井喜美直さん

次に奥井喜美直おくいきみなおさん。この方は1932（昭和7）年、鹿児島県の奄美大島の生まれでございまして、2008（平成20）年に76歳でお亡くなりになりました。48年間、菊池恵楓園に在園されました。年長にもかかわらず岡山の長島愛生園にあった呂久高等学校第4期生として入学されましたが残念ながら中途退学されました。

奥井さんは金陽会きっての理論家でありまして、その人柄と抽象化された才能を反映した非常に重厚な味わいが、見る人を惹きつける作品が多いです。吉山安彦さんとお2人でずっと金陽会をリードされた方です。

昨年2018（平成30）年3月、「ふるさと奄美に帰る展」では、7歳違いの妹さんが奥井さんの絵を何度も見に来られたそうでありまして。7人兄弟の奥井さんは生涯にわたって家族との関係はずっと続いておりました。ずっと手紙のやりとりもされていたそうでありまして。奥井さんは今、海を臨むふるさとの集落で懐かしい人たちと一緒に眠っておられます。

奥井さんが残された作品は200点以上で非常に多いわけでございますけれども、やはりふるさと奄美をテーマにした漁、あるいは魚の絵が非常に多いですね。奥井さんの絵というのは色彩が豊かで濃厚なものがありまして、心和む作品が多いです。

この「アマダイ」ですね。まさかこれを木村さんがポスターに使用するとは。非常に画期的、びっくりしました。この「アマダイ」がポスターになり、パンフレットに紹介され、私たちは、ある意味では改めてこの作品の意味というのを教えられました。多分これは夫婦ですよ。奥さんと共に仲むつまじく療養所の中で生活するというところでございますし、夫婦の仲の良さというものが表現された絵だと思えます。

彼はよく『菊池野』にもエッセイを残しております。彼は『菊池野』にこんな文章を残しております。

「絵は私に満足と豊かな喜びを与えてくれました。

絵を愛するが故に、小鳥と囁き、人の哀れみを知り、詩を読むことを教えてくれました」。

奥井さんは高校に行かれまして私の先輩でもある方ですけれども、大変本格的な絵を描かれる方でしたね。自分はセザンヌを目指すんだと言っておられました。そういった方であります。

◆奥井紀子さん

次が奥様の奥井紀子^{おくいのりこ}さんですね。紀子さんは1941（昭和16）年佐賀県の生まれで現在78歳で、現在はセンター（第2センター）というところで生活されております。

紀子さんの作品は水彩画が非常に多いですね。花や果物など作品を数多く残しておられます。紀子さんの絵には夫であった奥井喜美直さんの影響が多分に見られまして、ご自宅で一緒に描かれていたせいかも知れません。

10年前にご主人の奥井喜美直さんを亡くされて以来、残念ながら紀子さんは絵筆をとっておられません。多分、お2人で描くことが楽しみであり生き甲斐であったかもしれません。彼女の作品はどこまでも明るく、そして無邪気です。

◆木下今朝義さん

それから次が木下今朝義^{きのしたけさよし}さんです。木下さんは1914（大正3）年宮崎県生まれですね。実は僕の親父も1914（大正3）年生まれなんですけれども、この木下今朝義さんはなんと99歳まで生きられました。もう一歩で100歳だったんですけれどもね。残念ながら2014（平成26）年、99歳で逝去されました。

この方はですね、1931（昭和6）年に入所されています。でも木下さんは若い頃から野球もし、それから自治会の農園部で働きながらよく野菜を作っておられました。よく園内の給食棟にそういった野菜類を出荷されておりました。

木下さんは絵筆をとったのは60歳を過ぎてからでした。それは大山清長さんの影響が非常に大きかった訳です。大山清長さんの作品を見て自分も絵を描きたくなったということです。

この木下今朝義さんの「遠足」なんですけれどもこれは木下さんの代表作であります。この「遠

足」という作品は、彼は6歳で発病したんですけれども、彼の唯一の、6歳の時の小学校の遠足の思い出を描いた作品です。彼がこの絵を描いたのは実に82歳の時でした。82歳の時にこういった6歳の時を思い出しながら絵を描くというのは、よほど印象深かったのだと思いますね。ただ唯一の遠足を、82歳の時にこの絵を描いたのですからね。吉山さんに言わせるとこの作品は恵楓園の宝、金陽会の宝であると非常に高く評価されております。

次の「集団脱走」、これは非常に社会的な絵でありますけれども、実は1932（昭和7）年1月17日に実際におきた事件でありまして、塚本主事留任運動に関わる、いわゆる集団患者脱走事件をテーマにした作品ですね。彼が入所したのが1931（昭和6）年です。翌年の1932（昭和7）年にこの事件に遭遇した訳なんです。入所したばかりの17歳の彼の目に映った衝撃というのは、相当大きなことだったと思います。この「九」と描いてあるのは、法被の「九」は九州療養所の法被なんですね。青年会、婦人会、たくさんの女性の顔が映っているのが非常に印象的で、この時の婦人会の力というのが強かったんですね。塚本主事は女性の方に非常に人気のあった方だったんじゃないでしょうか。留任運動を起こしたんですけれども、残念ながら他の施設に転勤されました。そういった作品です。これを絵に残すということは、木下今朝義さんの印象に残った事柄だったのでしょう。それはそうでしょう、17歳というのは最も多感な年頃ですから、現実にもこういったことを目の前にしてですね、そのショックというのは非常に大きかったと思います。戦前、職員の中には、患者さんの方に寄り添う職員もおったんですよ。非常に少なかったですけどね。一国家公務員として30年40年を定年退職まで、公務員として、あまり患者さんと接触もなくという方も結構見られますけどね。それはそれとして公務員の生き方なんでしょうけれども。中には患者さんのサイドに寄り添いながら、そういった職員の方も戦前も戦後もおられましたですね。多分これは木下さん自身が、塚本主事に大きな愛惜があって、こうした作品として残しておきたかったんじゃないかなと僕は推

測しておりますけれども。そういった作品です。非常に社会的な、歴史上の一コマを油絵で残してくれました。

これは「家族」という作品ですね。これはセンターの居室ですね。木下さんの家族はたくさん面会に来られています。この頃になると、センターも鉄筋コンクリートで生活のレベルもかなり改善されて療養所の生活というのも非常に安定してきた頃の作品ですね。子どもたちと一緒に非常に和やかな風景ですね。こうした家族との交流があったと良かったと思います。99歳まで生きたということは大変なことだと思います。

◆中原繁敏さん

次が中原繁敏なかほらしげとしさんですけれども、中原さんは1926（大正15）年熊本県の天草生まれですね。1958（昭和33）年に菊池恵楓園に入所されたので、既に33歳でした。ですからふるさとは奥さんがおるし子どもさんもおられたでしょう。そういった状況で入所されたってことはかなりの決断が要るでしょう。2014（平成26）年に85歳で逝去されました。

彼の今回の展示作品の「鎖」という作品は、2000（平成12）年に制作された作品でして、この頃ちょうど、当時ハンセン病国賠訴訟の真っ最中でありました。多分その裁判の影響だと思うんですけども、この鎖で閉じ込められた監禁室、実はこれ、現物が恵楓園に今も残っております。この監禁室はらい予防法が廃止されてもなお、不条理な差別、偏見によって自分たちは自由に身動きがとれずに暮らしている、そういった様を多分彼は描いたんだろうと思います。監禁室に鎖をですね巻き付けているということは、まだまだハンセン病の偏見・差別は払拭されていませんよ、ハンセン病問題まだ残っていますよということだと思いますね。これも3年前に、できるだけ昔の資料をそのまま残しながら改修工事させていただきました。いわゆる恵楓園の歴史的建造物の1つであります。この監禁室にはのべ300人くらい収監されました。いわゆる患者の無断外出、それから職員に対する反抗的な患者、それから園内の治安を乱した者、そういった者をここに監禁しておりま

した。懲戒検束規定というものがあまして、施設長にそういった権限が付与されておりました。2週間、3週間、1ヶ月、減食処分だとか監禁処分を受けました。ほとんど無断外出、いわゆる患者の外出を防止するために設けられた監禁室ですね。これは全国の療養所にあります。今これ残っているのは邑久光明園と菊池恵楓園だけだと思います。これも歴史的建造物としてこれからも保存していきたいと考えております。

この「次郎岳」というのは天草の風景です。私もこの次郎岳の上に何回か登ったことがあります。これに登ると中原さんの故郷の御所浦の島を見ることができます。実はその御所浦だけまだ橋が架かっておりません。かえで号という船に乗って三角港に連れられて療養所に入ったということですね。「次郎岳」というのは思い出深い彼のふるさとの絵の一つでございます。

この「命」、これは中原さんの絶筆です。2014（平成26）年ですから、まさに彼が亡くなったその年に描かれた作品です。恵楓園には桜の老木が非常にたくさんございまして、台風によってよく倒れて木はそのまま放置されることがあります。多分やがて訪れる自分の命、自分の死を予感して描いた作品ではなかろうかと思っています。非常にたくましいです。たくましい古木ですね。彼の作品というのは非常に濃厚でありますし、この「命」にも、彼の命というテーマそのものが、深い意味が込められている作品です。多分彼は自分の死を予感したんじゃないでしょうか。また「再生」ということもあったかも知れませんが、非常にこのタイトルは意味深なところがありますね。

中原さんは吉山さんと同郷でした。同じ天草の出身です。ですから吉山さんに勧められて絵筆をとったということです。中原さんが絵を描いたのも非常に晩年になってからでありました。

◆堀崎一雄さん

次は堀崎一雄ほりさきかずおさんですけれども、堀崎さんは1927（昭和2）年に熊本県に生まれました。2014（平成26）年に87歳で逝去されました。

堀崎さんは1981（昭和56）年から1987（昭和62）年まで6年間にわたって全患協中央執行委員

として、この多磨全生園の本部に勤務されました。僕もこの頃役員をやってまして東京出張の折はよく堀崎さんからご馳走になったり、車で案内していただいたりしたことをよく覚えております。

堀崎さんの作品というのは19点と少なく、その内油絵も5点でありましてかなり作品が少ないです。彼は作家活動というよりも自治会活動が長かったですね。

むしろ彼は私の印象では若い頃から演劇青年だったんですね。彼が絵を描いたところはあまり見たことがないです、実際は。多分自宅で描かれた作品が多いと思いますけれども、彼の作品というのは水彩画が多く、非常に透明感がある作品が多いですね。特に風景画、熊本県出身で阿蘇などそういった作品が多いですね。風景画を得意としました。

彼は自治会の闘士というか自治会の活動家というより、非常に物静かな紳士でしたね。堀崎さんにはもっともっと油絵を描いてほしかったです。堀崎さんも自治会役員として色々活躍されたけれども、自治会役員としてはかなり不遇な時代がありました。彼が全患協本部の中執(中央執行委員)から恵楓園に帰園した時にはもう、恵楓園の自治会執行部はいわゆる政権が交代しておりまして、彼は帰っても座るポストが無かったですね。そのポストに座っていたのは誰かというとは実は私が座っていました。それで非常に何ともいえない思いをしたわけですが、でもまあ、堀崎さんはその後自治会の役員としてのポストは無かったですけれども、長い間図書係主任ということで図書室に勤めて頂きました。

◆森繁美さん

それから^{もりしげみ}森繁美さんですけれども、森繁美さんは1930(昭和5)年長崎県の生まれで2005(平成17)年に75歳で亡くなりました。

彼はいつも補聴器を耳に当てて少年のような微笑みを見せておりました。全く他の人には描けない、嫌みの無い独特な絵を描いておられました。非常に異色の作家でもありました。繁美さんの作品もかなり人気があります。

時に山の絵が多かったんですけれども、その

フォルムというのは独特で個性に溢れておりまして、この展示作品の「根子岳」はたくさん描いておりますけれども、彼の代表作の一つであります。彼独特のフォルムですよ。この色彩も。

彼はスケッチに出かけても決してその現場ではスケッチをされません。なぜかと尋ねますと、頭を指して「全部この風景は頭の中に入っている」と言われまして、アトリエで絵を描いておられました。そういったことで周囲の人たちは「おまえは天才だ」といってびっくりしておりました。

森さんも実はかなり手がご不自由で、なかなかチューブから絵の具を出すのもご苦労があって、それでもゲートボールが好きでよくゲートボールされておりまして、愛称は「繁美ちゃん、繁美ちゃん」と言われて、非常に明るくてひょうきんな方でたまに興が乗ると一人でよく踊っておられました。お酒を飲むとよく踊られるんですね。非常に憎めない方でありました。

中原さんとは良き親友であり良き飲み友達だったんです。1930(昭和5)年生まれで。75歳で亡くなって残念です。

この「納骨堂」も実際の納骨堂を描かれています。今この納骨堂は、改修しましたので、ちょっと入り口が絵と変わってますけれども。これはキャンパスに直接、絵の具を塗られたんですね。両脇の白っぽいのがどうも人骨というか人の頭といますか、これだけたくさんの方が亡くなったよということを表現されていると言うんですね。

森繁美さんは自分が多分この納骨堂に入るからこれを描いたのかなあと、俺はこの納骨堂に眠っているから、ということを表現されているのかなと思いますけれども、森さんが亡くなったら実はご遺族の方がご遺骨を持って行かれました。

恵楓園は1909(明治42)年の創立以来今年(2019年)で110周年になりますけれども、この間のべ3,800名の方が亡くなっているんです。その中でこの納骨堂に今ご遺骨として納められているのが1,334体です。約3分の2がご遺族の方がご遺骨を引き取っていかれたということは全国的に異例で、他の療養所では3,000、4,000、5,000とほとんどの方のご遺骨は納骨堂に眠っていますが、恵楓園の場合は非常に交通アクセスがいいのか啓発

が進んでいるのか知りませんが、ご遺族の方が引き取っていかれるケースが多いんですね。

◆矢野悟さん

次は、^{やのさとる}矢野悟さんですね。この方は1942（昭和17）年大分県の日田市生まれですね。現在77歳で、実は第3センターという不自由者棟でご健在です。ただ残念ながら2年前に失明されて、もう絵を描くことはできません。

彼とは子どもの頃から同じ少年舎で起居を共にした間柄です。学年では2つ彼が上でしたけれども、彼とはかなり付き合いがありました。

よく彼と連れだって熊本市内に映画を観に行っていたことを覚えています。昭和30年代の話ですけれども、洋画を観た帰りには20円のうどんを食べて、自転車で帰りました。熊本市内から恵楓園までちょうど12キロある道のりを、自転車で帰りました。彼は、バート・ランカスターのファンだったんですね。いまバート・ランカスター知ってる人は少ないと思いますけど。

彼は、大人になったら映画の看板描きになりたいとよく言っていました。実は彼の父親も絵が得意で不自由者棟におられました。よく園内で花札の絵を描いておられました。矢野さんは、通常「大野明夫」と言われて、「あきおちゃん、あきおちゃん」といってですね、あきお君と一緒に、僕も矢野さんのお父さんの花札の絵を、いわゆる猪鹿蝶の絵を描くのをよく手伝っておりました。最後は卵の卵白で花札のツヤを出すんですね。その時の花札をとっておけば良かったなあと思ってますけれども。トランプよりも花札の方が面白かったですね。

実は彼も中学校卒業すると社会復帰されて、残念ながら再発をして再入所して、再入所してから本格的に絵を描き始めたんです。残念ながら15年ほど前から段々と目が不自由になりまして、絵を断念せざるを得なくなりました。彼にはもっともっと大作を描いてほしかったです。

彼の今回の展示作「きょうだい」も非常に人気のある作品です。このきょうだいは実は2歳上のお姉さんですね。2人きょうだいだったんですけれども、2歳上のお姉さんと愛犬が描かれている

絵です。この2人の後ろに描いている大人の黒いシルエットがあるんですけども、1、2、3、4…、5人ですかね、黒いシルエットがあるんですけども、「おい、矢野さんこれあなたの家族か？ あなたの両親か？」と聞いたんですよ。したら彼いわく、「いやいや、後ろの黒いシルエットは絵の構成上描いたものであって、自分たちが大きくなったらあの位の背の高さになるんだろうなという大人のイメージを描いたもの」だそうで、家族とは全然関係なくてあくまでも2歳年上の姉さんとの思い出を描いたわけですね。

今も姉さんは、大分の日田におられてご健在ですけれども、面会に来られることはありません。非常に仲の良かったきょうだいだと思いますね。彼がこの「きょうだい」の絵を残したのはやはり、姉に対する思いというのを、絵として残したかったんじゃないですかね。

とにかく矢野さんも、父親譲りの絵が得意で、小学校時代から賞もたくさんもらったと言っていました。

彼とは中学卒業以来ずっと別れてますんで、彼が社会復帰してどういう生活されたか分かりませんが、まあ、非常に苦労したそうです。一番困るのは保証人がいなかったこと。ありとあらゆる仕事をしたと言っていました。一か所にあまり長く勤めると自分の病歴がばれるんじゃないかと思ってほしい1年か2年で次々と職を変えたということでした。彼は社会復帰しても苦労したんだなあと思います。今も相変わらず頭もしっかりとしてましてセンターに行くとき色々話をしてくれます。

◆吉山安彦さん

最後が^{よしやますひこ}吉山安彦さんです。吉山さんは1929（昭和4）年熊本県天草の生まれです。現在90歳です。今年2019（平成31）年卒寿を迎えられて、今年3月には初の画集「月の記憶」を自費出版されました。そして4月には近くの画廊喫茶で卒寿記念油彩画展を約1ヶ月間開催いたしました。彼は現在でも創元会の会友として県内外で活躍する現役の作家です。90歳の現役の作家です。「令和の時代になっても俺は描き続ける」と意気軒昂であ

ります。

展示作に「陽だまり」という作品があるんですけども、これは恵楓園の分校の裏手にある北側のコンクリート壁を描いたもので、現在でも東西500メートル残っていて、患者逃走防止のために作られた言わば隔離の壁であり、入所者にとっては厚い壁であります。彼は小鳥を描いているんですけども、小鳥のように自由に羽ばたきたいなぁという思いをこめて、この絵を描いたそうです。

現在このコンクリートは東西500メートル残っていますが、これも全面補修をして吹き付けを行って今はきれいになっています。ボロボロだったんですけどね。5年前でしたかね、補修工事させて頂きました。これも恵楓園の歴史的建造物の一つだと思っております。まさに我々にとっては厚い壁でしたけれども、今では防音と防犯のために役に立っています。

この裏側に市道が走っているんですけども、この市道の先には本田技研だとかSONY、富士フィルム、三菱電機だとかいろんな企業が進出しておりまして、大体熊本県の工場出荷額の半分はこのコンクリート壁の裏を通して出荷されております。

この分校そのものは1976（昭和51）年に閉校になって以来、全部の教室をアトリエとしてずっと利用させて頂きました。私はこの学校で小学2年から中学卒業まで7年間学びまして岡山の高校に行ったんですけども、教室からいつもこの風景を見ていました。いつか私もこの塀を乗り越えて見せるぞということで、いつもそういう思いでしたね。まあおかげさまで高校も大学も行くことができました。そういう思い出深い、私としても少年の頃を思い出す絵ですね。

吉山さんは名実共にこの金陽会のリーダーであり、その存在というものは非常に大きなものがございます。もし彼がいなかったら、金陽会の作品というものは亡失をし、散逸してしまっていたらろうというのは間違いの無いところであります。

私も吉山さんと長い付き合いでございまして、年はかなり違いますが、自治会の印刷所でも9年間一緒に仕事をさせて頂きました。

この印刷所が閉鎖後も吉山さんら10人ほどで山の会というのを作ってですね、九州、四国、中国の山をずっと登りました。一番の思い出は1991（平成3）年富士登山ですね。屋久島にも登りましたし大山にも登りました。私は写真を撮り、彼は山の絵をかいておりました。楽しかったですね。元気があったなぁと思って。

とにかく吉山さんは絵を愛し、歌を愛し、山を愛した非常に心優しい先輩でした。彼はカラオケも踊りもうまいですね。今でも吉山さんとは親しくお付き合いさせて頂いております。

もし恵楓園で文化勲章があればおそらく彼が第1号の文化勲章の該当者になると思っています。恵楓園の文化活動の中で彼の活躍というものは非常に大なるものがございます。

先日、5月27日の熊本出張中の木村さんと、大高さんと一緒に、吉山さんの90歳のお祝いをホテルで一緒にさせて頂いて、喜んで頂きました。楽しいひとときでした。その時木村さんとは今日の講演会の打ち合わせをさせて頂いたんですけども、できれば吉山さんが講演して頂ければ一番良かったんですけども、何しろどうも飛行機に乗るのがちょっと……というような感じで、まあ90歳ですから、じゃあ代わりに私がということで、こういう企画になったわけです。

吉山さんは90歳でもまだ現役で、一生懸命頑張っておられます。ただもう運転は辞めろと言っております。多分免許証は返納したと思うんですけども吉山さんの車庫にはまだ車が残っておりまして、もう彼は運転することは無いと思っておりますし、私たちもそれを望んでおります。

吉山さんがこうしてご健在ということは、大変ありがたく思っていますし、今日の金陽会絵画展がこうして開催できるのも彼のおかげだと考えております。

◆まとめ 金陽会作品に対する評価

最後に、今日の私の講演をひとつまとめてお話を終わりたいと思います。戦後も隔離政策がずっと続いたわけです。療養所の中は非常に暗くて貧しかったです。そういった療養所の中でもただひたすらに、生きるために絵を描き続けた人々がい

たということです。

金陽会には、約20名の方がおられました。今日はその内10名の方しかご紹介できませんけれども、隔離政策という厳しく制限された生活の中で、生きる喜びを追い求めたその姿というものは非常に私は尊いと思いますし、まさにそこに人間の尊厳を私は見る思いが致します。

彼ら金陽会の仲間たちは全く専門の美術教育も受けておりません。そしてまた特別な絵の師を持つこともありませんでした。言わば独学の精神において、誰にもこびること無く、その我流を貫き通した。そしてそれぞれが、独自の表現を極めていったということですね。どれも非常に個性ある作品で、楽しくもあり、愉快的絵だと、僕は思っています。

彼らにとって絵を描くことだけが、絶対隔離という闇の中で、この世に生を受けた、その自己存在を示す方法でもあり、暗い闇の中で光を求め続けていったというその生き方に、非常に敬意を表したいと思います。彼らは人生を諦めなかったということです。

彼らの作品はどこまでも純粹で素直であり、そしてまた静穏でもありました。彼らの長い創作活動は恵楓園の文化活動の歴史におきましてもその花を咲かせ、大きな足跡を残してくれました。私どもはこの貴重な文化遺産を今後とも生きた証としてハンセン病問題の普及啓発に生かしていきたいと思っております。引き続き皆様方のご理解とご支援をよろしくお願ひしたいと思ひます。

現在、恵楓園では社会交流会館の再リニューアルを計画いたしております、彼らの金陽会の作品850点をそこに収蔵し、ギャラリーも設けたいと思っております。3年後には完成いたします。今回この資料館に展示されている作品はその850点の中のわずか30点です。3年後には是非、恵楓園の社会交流会館に訪問頂きまして、彼らの作品を観て頂ければ幸いです。どうも本日はご清聴ありがとうございました。(拍手)